

タイトル： 洋上救急の記 (1) ことの始まり

地球の反対側、南半球の海上を航行しているある一隻の漁船の誰とも知らない船長さん（あるいは衛生員さん？）と真夜中の3時頃電話でタイムラグもなく話すシーンを思い浮かべてください。相手の電話はおそらくHAM無線か何かなのでしょう、ピーピー、ガーガーの雑音で聞き取りにくい。それがいかにも遠くの果てしない海上であることを想像させてくれます。 ああ、赤道の向こう側なんだなあ、と……。

時は1980年代、もちろんパソコンなど普及しておらず、インターネットも生まれてさえない、もちろん携帯電話など無い時代。

「ピーピー … ええ … こちら〇〇丸、指導お願いします。45歳1名、右下腹部に少し痛みあり、熱はなし、ガー … ピー … ご意見願います」
「こちら当直医の本多です、腹全体のあちこちは硬くないですか？」
「ピーガー … や … わらかい … です」
「最寄りの港はどこですか？」

……というように相手は素人さん、少ない情報で指示を出さなくてはならない。たいていは最寄りの港、と言っても寄港できるまで3～4日はかかるとかその時の天候にもよる。また、その国が水準以上の医療施設を持っているかどうか、まったくの運だ。聴いてよほどの緊急事態だと思えば、ヘリコプター救助を近隣の国に要請するよう指示する事になる。近隣にヘリを飛ばせる近代国家があればよし、そうでなければ祈るしかない。

「了解しま … ピー … た … ありがとうございます … ガー … た」

こんな感じで、うちの病院は船上トラブルをボランティアで対応していた。夜間は当直医が任されるが、他の専門科に相談出来ない場合は、なんとなく終わった後も後ろ髪をひかれる思いだ。

真夜中の暗い廊下を当直室に戻りながら、なんと遠く、母国から離れて漁獲と格闘しているのだろう、と彼らに心を馳せるのだった。

ここは横浜のとある中小病院、なぜか海の上の船舶における病気相談に応じている。ここへ赴任して初めて知らされた時は「どうして？」と思った。そういう仕事こそ「船

員保険病院」がやっていると思っていたからだ。聞くとこれには深い理由と伝統があり、ひも解くと陸軍病院や海軍病院の昔にまで遡るらしいので、これくらいで止めておこう。

夜の電話対応程度なら、どうということはなかったのだが、ついにその日はやってきた。それは、ある日唐突に始まった。

一日の正式な仕事も終わる頃、整形外科部長に呼ばれた。

「ちょっとね、行ってほしいんだ、船でね」

「え？うち（整形外科）関係の患者なんですか？」

「うん」と、部長は得意のパイプをくゆらせた。

「今... すぐ、ですか？」

「うん、そう」

「明日の僕の患者のヘルニアのオペは？」

「僕がやっとく」

・・・うーん、僕に！と言って頼まれた患者、目の部長はお世辞にも腕がいいとは言えない・・・悩む。が、断る選択肢はこの時はなかった。とりあえず船上の患者の容態からシーネと包帯、布絆を大量に鞆に詰め、白衣を着たまま玄関に向かった。玄関には事務長と薬剤部長が見送りに来ており、ニコニコしながら、

「頑張って安心して行ってきてください」と、言う。

「安心して？」と、僕。

「先生に何かがあったら、1億円、奥さんに渡りますから！！」 うーん・・・。

社会人の普通の感覚で計算できれば、1億で命を預けるのは安心どころか怒るべきだったが、日頃の安月給ゆえうっかり騙され「1億円かぁ、それも良いな」と思ってしまった。

玄関の前にはすでにタクシーが待っていた・・・話はできていたのだ。この時はまだこれから始まる体験がどれほど過酷なものか！想像もできなかった。

つ・づ・く